

とけんなき
杜鵑啼 山竹裂

(杜鵑：ほととぎす)

齊藤 征雄

曹洞宗の開祖道元は『正法眼蔵』の中で、中国の天童山で師の如浄と接したときの忘れられない体験を記している。

道元は、深夜太鼓の音で如浄の集合の号令を聞いて急ぎ参じた。微月がもれる静寂の中、杜鵑が啼き裏山の竹が裂ける音が聞こえる夜だった。入室話という、儀式ばらない法話の場であった。如浄は「杜鵑啼、山竹裂」の言葉を発して黙した。

一般には、煩惱が杜鵑の一声すなわち師の一声によって微塵に裂きくだかれると解されるが、ここでの正確な意味はそうではない。杜鵑が啼いたその結果山竹が裂けたという、因と果の関係ではないのである。

杜鵑の一声と山竹の一裂はそれぞれ別々に独立して起こりながら結果として同時に起こった。なぜか。それは時節が到来したからである。

それぞれ独立したものが独立して働きながら、結果として合一する。以心伝心とでも言おうか。如浄はそれを示し、道元もそのように理解した。

禅では、この機縁の熟することを「啐啄同時」という。雛が卵の殻を破って生まれるとき、同時に親鳥が外から殻をつついて雛がかかる。両者、遅すぎても早過ぎてもいけない。

道元は、その時の感動を思い起こして記したのだが「杜鵑啼 山竹裂」の緊迫した響きは私などにもその感動が伝わる。

仏教では、すべてのものは縁起によって無数の要素が因果関係を結び、存在を構成すると考える。ただしその存在は一瞬間だけである。瞬間的に生起して消滅する。そして次の瞬間に新たな構成要素によって新たな因果関係が結ばれ、また生起し消滅する。持續して存在すると見えるものは、このような瞬間瞬間の連続が積み重なったものなのである。連続が途切れれば、存在するものは滅する。生きるものはいずれ死ぬという、無常の根源がそこにある。

生滅の契機は何によるか。まさに機縁、時節到来としか言いようがない。

こうした発想は日本文化の底流にもなっているが、やはり意識の底に仏教の影響があるのだろうか。